

Midnight Press

2010.4.13



「midnight poetry lounge」レポート I

いま、詩はどこにあるのか？を尋ねる道のひとつとして ミッドナイト・プレスでは、詩について話し合う midnight poetry lounge を年4回の予定で開いていくことにしました。その第一回、midnight poetry lounge vol.1「ジェイムズ・ライトの詩を読む——詩と翻訳、詩と自然——」が、さる1月30日（土）、神保町の東京堂書店6F会議室で行われました。以下は、その報告です。

midnight poetry lounge vol.1

「ジェイムズ・ライトの詩を読む——詩と翻訳、詩と自然——」



(左から正津勉氏 伊藤博明氏 司会の中村剛彦氏)

この企画は、昨年、小社から刊行されたジェイムズ・ライトの選詩集『カワカマス』の訳者である伊藤博明氏と、東京新聞の2009年回顧で、「わずか十八編の薄い小詩集だ、だがその詩の光のとどくさきは深く広い」として『カワカマス』を取り上げられた正津勉氏に、ライトの詩の魅力についてお話しいただいたものです。

当日は、まず伊藤氏によるライトのプロフィール紹介から始められた。

ライトの「ある祝福」(A Blessing)、「ミネソタ、パインアイランド、ウィリアム・ダフィーの農場で、ハンモックに寝そべて」(「Lying in a Hammock at William Duffy's Farm in Pine Island, Minnesota」)の朗読を聴いた後、伊藤氏は、平明なことばで深いイメージを喚起するライトの詩を、「暗誦する」＝「心を通じて学ぶ」(デリダ)のように読んできたこと、ライトの詩について語った。ライトは、GIとして日本を訪れたことがあり、富士山の前に二度立ったことがあるそうだ。

続いて、正津氏が、1980～81年とアメリカのアイオワからミシガンへと滞在した経験を振り返りつつ、アメリカ詩との出会いについて話された。アメリカの詩は、東海岸(ニューヨーク)、中西部、西海岸(カリフォルニア)の三つに分けられるが、東海岸+西海岸のような街の詩を書いてきた自分が、街の詩と別れようとしていた頃にヘイデン・カールの詩を読んだのを契機として、以後、ブライ、ライトなどの中西部の詩人たちに惹かれていったという。そして、伊藤氏が訳した『カワカマス』は、低い声で語るライトの魅力がやわらかい日本語となっていると云われた。

その後、両氏によるトークとなったが、そこで、正津氏が日米の詩における「自然」観の違いについて語られたのが興味深かった。日本の場合、近代詩人は自然との関わりを詩としてきたが、敗戦により、「四季」に象徴される自然詠が反省されたのを契機として、いまや自然詩は捨てられた観がある。対して、アメリカでは、例えば「鱒釣り」など、「自

然」と人間との関わりが、ヘミングウェイから、レトキ、ライト、カーヴァーなどへと、いまも文学的に伝承されている、と。

そして伊藤氏は、ロバート・ブライの「ジェイムズ・ライトは天使にとどまる詩人ではなかった。彼は深呼吸をして、降りていったのだ」ということばを引いて、ライトは、告白的抒情ではない、清冽な抒情を生む想像力の水脈へと「降りていった」のではないかと語った。

休憩後、伊藤氏、正津氏と来場者の方々を交えてのフリートークとなったが、正津・伊藤両氏のことばによって奥行きを与えられたライトの詩は読む者に深い印象を残した。(文責・岡田幸文)

A Blessing

Just off the highway to Rochester, Minnesota,
Twilight bounds softly forth on the grass.
And the eyes of those two Indian ponies
Darken with kindness.
They have come gladly out of the willows
To welcome my friend and me.
We step over the barbed wire into the pasture
Where they have been grazing all day, alone.

They ripple tensely, they can hardly contain
their happiness
That we have come.
They bow shyly as wet swans. They love each other.
There is no loneliness like theirs.
At home once more,
They begin munching the young tufts of spring
in the darkness.
I would like to hold the slenderer one in my arms,
For she has walked over to me
And nuzzled my left hand.
She is black and white,
Her mane falls wild on her forehead,
And the light breeze moves me to caress her long ear
That is delicate as the skin over a girl's wrist.
Suddenly I realize
That if I stepped out of my body I would break
into blossom.

ある祝福

ミネソタのロチェスターへ向かう公道を すこしはずれて

薄闇が やわらかく 草の上をはねていく

そして 二頭のインディアン・ポニーの眼は

やさしく かげる

かれらは 柳の木立から出て ぼくの友人とぼくを

うれしそうに 迎えた

ぼくらは バラ線をまたいで 彼らが一日中

二頭きりで 草を食んでいた 草原に入っていく

かれらは こわばったように身を震わせる

ぼくらがきた

うれしさを おさえきれないのだ

かれらは はにかんで 濡れた白鳥のように首を振る

愛し合っているのだ

こんなすてきな孤独はない

また 前のようにくつろいで

二頭は 暗がりでは若い春の芝生をほおぼりはじめる

ぼくは この腕に 瘦せたほうの馬を抱いてみたい
彼女は ぼくのほうに歩み寄って
ぼくの左手に鼻をこすりつけた
彼女は 白と黒のぶちで
たてがみは 額にかかって乱れる
この軽やかな風に ぼくは 少女の手首の肌のように 繊細な
彼女のながい耳を愛撫したくなる
ふと ぼくにはわかるのだ
この身体を抜け出したら ぼくは ぽっと
花開くだろうって ことが



「カワカマス〜ジェームズ・ライト詩篇」

伊藤博明訳 A5判・並製・本体 2000 円

ISBN978-4-434-13755-6



(James Wright1927—1980)

*ジェームズ・ライト (1927—1980) は、エリオットやパウンドなどの知的な詩のあり方に対して新たな詩的感性を提示したアメリカの詩人たちのひとりで、1972年にピューリッツァー賞を受賞しています。

ディープ・イマジストの友人ロバート・ブライは、ライトについて次のように語っています。

「ライトの詩を読むとき、われわれは素晴らしい響きという窓を通して草原に見入ることになる。ヒメネスは生涯この輝きのなかにいた。白居易もそうだった。ウォレス・ステーブンスもその輝きに忠実だった。生涯この輝きのなかにいる詩人を、ガルシア・ロルカは天使と呼んだ。だが、ジェームズ・ライトは天使にとどまる詩人ではなかった。彼が取った道は何だったかって？ そう、彼は深呼吸をして、降りていったのだ」



(正津勉氏 1945～)

*しょうづ べん 1945年、福井生まれ。

(伊藤博明氏 1957～)

*いとう ひろあき 1957年、東京生まれ。



midnight poetry lounge vol. 2

「西脇順三郎の詩を読む — 超現実主義と産土」

講師 井上輝夫

日時 2010年5月1日(土) 2時～5時

場所 神保町・東京堂書店6F 会議室

会費 1500円

予約・問い合わせ先

poetrylounge2010@gmail.com (中村)

070-5579-1564

produced by midnightpress